



映画制作の経緯と米国卵子提供ビジネスの現状

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-09-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳原, 良江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004850

シンポジウム「卵子提供について考える」

映画制作の経緯と米国卵子提供ビジネスの現状

柳原 良江

こんにちは。ただいまご紹介に預かりました柳原と申します。いただいた時間で、まずはこの映画の日本語版を作るに至った経緯と、それから、情報として実際に日本人による米国での卵子提供の状況と米国の卵子提供一般の状況を説明したいと思います。

「代理出産を問い直す会」について

この日本語版を制作したのは「代理出産を問い直す会」という団体です。これは2008年に当時東京大学の死生学研究室に勤めていた若手研究者3名により設立しました。私が代表として活動しています。どうしてこのような会を作ったかと申しますと、2008年は、ちょうど向井亜紀さんの代理出産に関する最高裁の判決や日本学術会議の報告書に影響を受けて、代理出産に対する議論が盛りあがっていた時期です。その当時、私たちはマス・メディアで代理出産に関する報道を頻繁に見聞きしまして、また学会でもそれに関する報告が増えていました。そこでは、一般的に全体的な傾向として依頼者の視点に立ち、「不妊カップルはかわいそうだから、だから代理出産を認めるべきだ」、そういった論調で述べられるものがありました。しかし我々は、それでは本来もっともこの問題で重要なはずの代理母のこうむる問題が置き去りにされているのではないか、という疑問を抱きました。とくに我々設立者たちはまだ当時若手で経済的に不安・困難を抱えていました。そしてもちろん若いということで、我々はこれを身体的にも代理出産の問題は依頼できるかどうかといった依頼者の問題ではなく、依頼される側、代理母の問題として考えていました。しかしながら、

マス・メディアや学会の中心の方たちは、それらについて語ろうとしない。そういった現状を見て私たちは、この状況をなんとかしなければならぬ、そのためには誰もしないのだったら自分たちで動こう、声を挙げていこう、研究をしていこうと思うようになり、手弁当ですが、みんなで集まって研究会を実施するようになりました。

この「代理出産を問い直す会」のスタンスは、人文系の場で、その時々場の空気や政治に流されずに問題を考えることを重要視しております。我々がこの問題に対して特に深刻だと思ったのは、まずその当時、代理出産の是非について考えていた学術会議の場がおもに法律や医学の視点から論じられていて、そこに人文系の視点がほとんど省みられていなかったことです。代理出産というのは他者の身体利用を制度的に行うかどうかという、きわめて社会にとって重要な哲学的倫理的な問題です。それにもかかわらず、これら問題の本質は無視されるか、または議論の中心からはずされて、それぞれの議論が行われていました。よく日本は生命に関する議論が薄い、哲学的な議論が薄いと言われていますが、このような状況を見ている限り、代理出産に関しては、むしろ社会がそれをさせず、法と医学の問題として矮小化させている、そういった構造的な問題もあったと思います。そのため、あえて人文系から発信をしていく、じっくり考えていく場が必要だと考えて、このような会を作る必要性を感じました。

それからさらにもっと私が深刻だと思ったのは、当時の生命倫理学者たちの対応です。この事件が起きるまで、研究者の業界ではこの問題に対しては大まかな合意として、全体的に「やはりこの行為は問題がある」という否定的な雰囲気がありました。しかしながら、この一連の出来事が起きてメディアで報じられ、議論が活発になったところから、生命倫理の専門家までもが特に何らかの新たな根拠もなく代理出産を推進する、そういった動きをみせるようになりました。そのような学術的セッションが開かれたり、またそういった場で、これまでは批判的にみていた人が何か意見を述べることなくただ沈黙したりするようになりました。おそらく、批判したくても圧倒的な世論の力の前で、それができないような、批判することがあたかもタブーであるかのような雰囲気が、当時あったのだと思い

ます。このような現実を目の当たりにしましたので、我々の会ではその場の空気や政治に流されずに議論することを重要視しています。

そして会の活動ですが、まず不定期に研究会を実施しています。それから時々代理出産に関する、または第三者の関わる生殖技術に関する様々な社会問題が生じたときには、声明文を発表してきました。そして、せっかく研究活動をしてきたのだから、何か社会と相互作用を持ちたいということで、現在は、積極的に人々に情報を伝えようと、社会還元を行う段階にあります。その一環としてこの映画も作りました。ちなみに「代理出産を問い直す会」は随時新入会員を受付中です。もしご興味がありましたら、私のホームページ等に連絡先がありますので、そこからご連絡ください。ホームページ「代理出産を問い直す会」で検索していただければ出るかと思えます。ちなみにツイッターもありまして、これもちょっと検索すれば出てくると思えます。第三者の関わる生殖技術に関するその時々の問題についての情報、またそれらに対する私の考えをツイートしています。

日本語版制作の経緯

なぜ我々の会が、敢えてこの映画の日本語版を作るに至ったかと言いますと、2010年に皆さんご存知の通り、野田聖子衆議院議員が米国で卵子を購入して妊娠したというニュースが報じられ、2011年1月に出産に至りました。そしてこれら一連の出来事に対する報道は、代理出産のときと同じく、やはり依頼者側、卵子をもらう側の視点ばかりで、その様な内容をもとに議論が進められようとしていたことに、我々は強い危機感を抱きました。実のところ、この時点で我々は、卵子提供についての問題をまだ十分には論じていなかったのですが、少なくともいま起きていることは危険だと感じていました。代理出産の時と同じく、何の深い議論もされず、問題が調べられていないまま、この方法が普及し、なし崩し的に容認されるべきものと捉えられつつある。そこで、我々はまずは問題意識を喚起しなければならぬと考えました。

しかしながら、今までの経験から、所詮若手の研究者たちが何か言って

いても、声明文を出していても大した反応は得られない事も感じていました。そのため何かもっと分かりやすいものを示す必要があるのではないかと考えていました。ところで私はこの時期、たまたまアメリカに滞在していたので、この映画のオリジナルである『Eggsplotation』という映画を知っておりまして、ならばその日本語版を作ったらいいのではないかと思いつきました。そして帰国後に、ジェンダー研究に関する助成金に応募したところ、無事に採択していただきまして、昨年7月から制作プロジェクトを開始しました。今年の2月から日本各地で上映会を実施しております。

卵子提供の現状

次に、情報として卵子提供の現状について説明いたします。まず日本の卵子提供、それも渡航生殖に関するものです。最初に公になったのは、1991年にアメリカの代理出産斡旋業者の支店である代理母出産情報センターが設立されてからで、ここが卵子提供も手掛けていました。そしてその2年後にはこのセンターで卵子提供を用いた妊娠例が公表されます。ですから、もしこの妊娠例で無事に出産に至ったのであれば、そのときに生まれたお子さんは、ちょうど今すでに成人しているか、いないかという年齢になっています。日本での卵子提供は決して新しい問題ではないのです。

それから、渡航生殖ではない日本国内のみの実施は、まず1998年に長野県の医師が姉妹間で卵子提供による妊娠例を公表しました。そして2007年になると、JISARTというグループが自主的に国内で卵子提供を実施し始めます。2014年には、自民党のグループが卵子提供を容認する法案を作成していて、ちょうどいま政治的に色々と動いている状況です。

次に、日本人による渡航生殖のうち、アメリカで卵子提供をしている／受けている人はどういった状況かについてお話しします。まず卵子提供者の求人は2種類あります。1つは現地に住んでいる日本人の留学生や、留学生に限らず若い日本人をリクルートするものです。それからもう1つが、日本に住んでいる日本人に旅費を支給して外国に行ってもらって、そこで採卵する。いずれの場合も、本人の手にする報酬は、為替相場にもよるま

すが50から60万円程度とされています。

そして卵子提供を受ける側の状況ですが、依頼者はもちろん日本人ですから、日本人やアジア人の卵子の需要があります。しかし依頼者の需要は、人種の違いだけにあるものではありません。当事者たちにとって重要なのはすぐに卵子を調達できるということです。日本人やアジア人の場合、需要が多いので、ウェイティングリストが長い。そのため場合によっては、それにこだわらず、すぐに卵子をもらいやすい、買いやすい女性の卵子を選ぶこともあります。

ところで日本人がアメリカで卵子提供をした場合の契約の詳細ですが、まず身体が様々な側面で管理されます。食事や嗜好品、アルコール、タバコですね。また夫であれ恋人であれ性行為が制限されます。そして、決められた量の服薬を続ける。映画にもありましたように、気分が悪いからといって、自分で薬を止めるといったことはできません。同様に自身の判断で中断することはできない。それから、自身の判断で、別の疾患の投薬、治療を受けることができない。それらを受けたい時は必ず契約した業者や医師に伝えなければなりません。映画の中で、具合が悪いのに、なかなか医師に連絡がつかずにいるという場面がありましたが、それはおそらくこういった契約によるものだと思います。

それから情報の管理。契約した方が卵子提供に関して、メディアを含めて他者に知らせてはいけない、そういった文言があります。ですから我々にはなかなかこのような情報が届かない。そしてこれら身体や情報の管理を含め、契約に違反した場合、卵子提供者は業者と依頼者に違約金を支払わなければなりません。そこでは、単にそれまでの医療費や交通費といった必要経費だけではなくて、業者が得べきであった利益も支払わなければならない。つまり業者の側は全く懐が痛まないようになっています。このような状態では、卵子提供者はもともとお金に困っている方が多いので、実質的に途中で契約を解除することは非常に困難です。

それでは具体的にどのように提供がなされ、報酬額が変化しているのか。その金額は学歴や人種により上昇します。学歴については、皆さんすぐに思い浮かぶように、名門大学だと金額が高くなる。たとえば、これは大学

新聞の広告です。イエール大学の大学新聞に掲載されたもので、イエール大学卒の医師と弁護士の同性カップルが、同じ大学の学生、自分たちの後輩にあたる女子学生の卵子を募集している。報酬は日本円に換算して150万から200万円、それに加えて必要経費が支払われます。一般の相場から考えると非常に高い金額であることがわかると思います。

それから、先ほどの内容に戻りますが、報酬は人種により変わります。人種で変わると言う、皆さんおそらく白人が一番高いだろうと思うでしょうが、そうではありません。東洋人や黒人のほうが高くなります。なぜかという、需要と供給の関係によるものです。白人で卵子提供する人はたくさんいる。しかし、東洋人や黒人には少ないので、市場の原理でそれらの報酬のほうが高くなります。あと、報酬は同じ人でも変化します。ある人が卵子提供をして、その人の卵による妊娠、出産率が上がると報酬はどんどん増えていきます。場合によっては100万円近くの報酬をもらえるようになります。例えばこの方、彼女は3500ドルから出発してどんどん上がっていく、4000ドル、4500ドル、そしてここで1万ドル。しかしながら、そのあとまた減っている。この後はあまり結果がよくなかったのかもしれませんが、けれどもここでまた上がり、8000ドル。このように報酬は常に同じ金額と決まっているわけではありません。映画の中に「脱落者価格」というのもありましたが、悪い場合は下がり、また打ち切られてしまいます。

それから、提供者の意識を調べた調査もあります。たとえば、卵子提供と精子提供、仮にそれぞれともに1年間連続的に従事したとします。そうすると、卵子提供による報酬は、精子提供による報酬と大体同じか、それよりもちょっと高くなる。つまり卵子提供の方が、若干多くのお金をもらえますが、提供者の意識はむしろ逆で、卵子提供者は「人助け」と考え、精子提供者はそんなにももらっていなくても、「これは仕事だ」と考える傾向にあります。ここに大きなジェンダー差が表れている。このようなジェンダー差については、色々な方がいま研究をしているところです。

それから、業者の意識。業者はどんな卵子提供者でもOKというわけではなくて、個人的に気に入った卵子提供者を雇う傾向にあります。どんなに条件がよくても、アイビーリーグをはじめ有名大学を出ていて、見た目

が良くても、性格を重視します。おとなしくて、とても素直で、業者とうまくいくような人を選ぶ。これは精子提供の場合とは対照的です。精子提供では本人の内面には関与せずデータに表れた条件を重視します。卵子提供の場合、報酬について質問する人は排除します。ですから余計に、報酬が安いままでも人々が問題にしないといった状況が生まれやすくなっているのかもしれませんが。それから、業者は自らの行為を人助けであると言いますが、実際には依頼者の経済状況に合わせて請求額を変化させています。ゲイカップルやシングルの場合、お金があるだろうと見込んで値段を上げる傾向があります。

最後に、この映画の内容をご覧になって、これは例外的な事例なんじゃないかとお思いの方がいらっしゃると思います。まだこういった問題は始めたばかりですから、どうしてもデータとしてなかなか世の中に出てきません。そしてたしかに日本の一般的な不妊治療では、多くの医師たちは患者さんの身体に負担がかからないよう、丁寧に時間をかけて採卵を実施しているのだと思います。しかしいまの時点で1つ言えることは、卵子提供の場合は一般的な不妊治療と異なり、短時間に大量の卵子が必要になるという条件が付きます。そういった条件下で、一般的な患者さんにするように丁寧に実施することは難しい。かりに一般的な患者さんのように時間をかけて身体に対する負担を少なくやっていると、長期間その方の身体を管理しなければならなくなります。そうすると、医学的リスクは減っても、また別の問題が出てきてしまいます。こうして卵子提供には、単に卵子を譲るといった単純な構造ではなく、卵子の市場化はもちろん他者の身体管理など、一般的な不妊治療とは違う問題を生じてしまう危険をもたらします。私の報告は以上です。